

グローバル化とローカル化をめぐって

——研究大会初日個別報告(前半)——

富沢寿勇

大会初日には 4 本の個別研究発表が行われた。まず前半の 2 発表について報告する。

岡本義輝会員(宇都宮大学)は、「何故、日系企業 R&D 部門は優秀なローカル技術者を採用出来ないのか?—マレーシアでの日系・外資系企業の事例研究から—」と題して、日系製品開発部門では約 1 割の日本人が基本設計と開発組織の管理を行っており、優秀な現地技術者によるローカル化が進んでいない現状が報告された。その原因として、日系企業が外資系のようにローカル技術者の採用に時間をかけていないことや給与面で格差をつけた待遇をしていないこと、そして、日系企業の中央集権的な海外 R&D 統治や平等主義などがその背後にあることが指摘された。大会 2 日目の目玉となったルックイースト政策についても言及され、同政策が R&D 部門の人材育成に十分つながらなかったと指摘された。本報告はアンケート調査に依拠するものだが、フロアからはこの主題にアプローチする上では補完的な調査法を考えてもよいのではないかというコメントもあった。また、同報告では「技術部門のマネジメントは先ず技術力が必要」と強調されたが、製品開発に際しては「優秀な技術力」のみならず、ローカルなニーズや消費文化の視点を的確に反映できるローカルな人材(あるいは、「ローカル」に通曉した人材)の登用も今後ますます必要になって行くと思われ、ひいてはそれが企業のイノベーションを導くことすらありうるのではないかという感想である。ローカルな人材の活用が企業のグローバル化の条件にもなることを示唆する興味深い報告であった。なお、発表ではパワーポイント 45 枚の重厚なレジュメが配付されたが、時間の関係で十分な説明が聞けなかったのは惜まれる。

続いて、伊賀司会員(神戸大学)による「ブルシ運動と 2008 年総選挙以後のマレーシア—活性化社会運動と市民社会の成長—」の報告がなされた。マレーシアの多方面における政治・社会改革を追求するデモとして展開してきたブルシ運動は、近年の社会運動の中でも、民族・宗教・言語以外の特定イシューや制度改革に関わるタイプのものに分類され、しかも国内外に拡大した点で、従来なかった特徴を示す。特に 2008 年総選挙後のブルシ運動は、それ以前の野党主導から NGO 主導によるものへと変容して広い国民運動となり、「選挙制度改革」というフレーミングを広義に使用した点、立憲君主政体内での穏健なデモであることを示すため、国王・スルタンのシンボルカラー(黄色)の T シャツを着用した点、ソーシャル・メディアや「フラッシュ・モブ」を活用して人々が動員された点、「ピクニック気分」の娯楽的要素を含んでいた点、そして、グローバル次元での社会運動のモジュール化に対応した点などで成功したと分析された。フロアからは、この運動は政府の想定内だったのかという質問があり、少なくとも総選挙後は政府の想定外の展開となったという回答であった。また、非知識人や都市部以外の地方への同運動の広がりはどうであったのか、さらには、同運動が在外マレーシア人の共鳴も得たということだが、その場合も民族・宗教・言語などの枠組みを超えた「国民」的次元で展開したのか否かという疑問も出された。それはともかくとして、フレーミングとモジュール化という概念装置を用いて、社会運動におけるローカルな象徴の操作とグローバル次元における人間行動の規格化という両側面を照射している視角はたいへん魅力的で、更なる研究の進展に期待したい。